

<追悼>滝瀬爵克(道雄)先生の思い出

田中, 単之

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

59

(開始ページ / Start Page)

104

(終了ページ / End Page)

104

(発行年 / Year)

1999-03-24

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020060>

滝瀬爵克（道雄）先生の思い出

田中単之

滝瀬先生は今年一月十一日、お亡くなりになった。七十三才とお聞きする。今時、早過ぎるお旅立ちであった。

先生は一九五一年より本学講師として、主として通教部を舞台にご活躍くださった。その深い学殖と真摯誠実なお人柄は、長く学生諸君の心に残ることであろう。

本誌編集にたずさわっている私の思い出としては、何と言つても『五十号』（特別記念号）にご寄稿いただいた先生の『万葉のみやびと「いちはやき」みやび―その連続性と不連続性―』という論文である。

伊勢物語にただ一回だけ現れる「いちはやきみやび」という言葉の「いちはやき」とは「非常に激しい」という意味なのであり、なぜこのような言葉が創出され、それが具体的に伊勢物語各段にどう展開されてあるかという明快な分析であった。万葉との関連も教えていただいた。

さて編集者冥利はこれに尽きなかった。三

年前の通教部卒業記念パーティの席、先生の方から声をかけてきてくださったのである。はじめてお会いし、そしてこれが最後であった。私は先生の著書『伊勢物語私論』（明治書院・一九八三年刊）をかなり熟読していたので、私見をまくし立てた。むろん愚論であるが、先生は黙ってニコニコ聞いてくださった。そして三日ほど後、御著『伊勢物語文学の世界』（古川書房・一九八八年刊）を送ってくださいました。もっと勉強せよ、という意味である。読んで納得し、愚論を修正した。

話しはもう少し続く。その後三年間、三回に亘って、先生が所属されていた水墨画会の展覧会の招待状を送っていたことになり。白と黒の濃淡だけでおそろしい迫力を持つ世界に私は圧倒された。一昨年、先生は産経新聞社長賞を受賞された。だが、昨年のものが私にはいつそう印象的であった。それは、ある御堂の前の石畳に、木もれ日がかすかに落ちてくる風景だった。

合掌。